

ヒューム『人性論』分析：記憶と想像の違いとは？

2020年4月26日 宮国淳

<http://miya.aki.gs/mblog/>

※ 引用される場合は、出典を明記して
くださるようお願いいたします。

本稿は、ヒューム著、土岐邦夫・小西嘉四郎訳『人性論』（中央公論社）における、記憶と想像との区分の問題について論じるものである。

拙著、

ヒューム『人性論』分析：「関係」について

http://miya.aki.gs/miya/miya_report21.pdf

・・・では、①抽象観念 ②時間・空間 ③複雑観念 ④因果関係 に関して分析を行っている。

本稿はその続編として、因果関係を構成する印象・観念における、記憶の位置づけ、記憶と想像との違いについてのヒュームの説明の問題点を明らかにし、いかに修正すれば実際の具体的経験と齟齬なく説明できるのか、論じていく。

なお、本稿における引用部分は、すべて上記の『人性論』からのものである。

<目次> ※()内はページ

1. 記憶・想像に関するヒューム理論の問題点 (2)
2. 記憶と想像の違いとは？ (4)
3. 想像した記憶、という場合もある (5)

1. 記憶・想像に関するヒューム理論の問題点

ヒュームは、因果推論における印象・記憶の必要性を強調している。

印象を少しもまじえないで、あるいは、せめて印象と対等であるような記憶の観念をまじえることもしないで、心自体の観念だけで推論してはならないのである。(ヒューム、48 ページ)

推理を無限に続けるのはわれわれには不可能なことである。ところが、推理を停止させるのは、記憶の印象もしくは感覚機能による印象だけである。というのは、こうした印象についてはそれ以上疑ったり、^{せんさく}詮索したりする余地はもはやないからである。(ヒューム、49 ページ)

・・・「推論」に印象・記憶が常に必要であるかどうかという問題はさておき（先に紹介した拙著でも論じている）、因果関係の「正しさ」を検証する場合、印象、つまり想像ではない事実としての出来事が知覚として現れていることが必要である、ということについては納得ができるように思える。単なる想像で因果関係が「正しい」と結論づけられるのであれば、結局どうとでも言えてしまう。「客観的正しさ」は事実、あるいは事実の記憶により担保される必要がある（しかし印象・観念という枠組みだけでは、因果関係の客観的正しさ・必然性の問題を完全に説明することができない場合もあるのだが、これについては後述）。

ここでヒュームは“記憶と想像との違い”は何なのであるか、という問題を提示している。そしてヒューム自身は次のように説明している。

新たに現れるとき最初の活気をかなりの程度まで保持していて、印象と観念との中間とも言えるような場合と、すっかり活気を失って完全な観念であるような場合とである。第一の仕方で印象をくり返す機能は「記憶」と呼ばれ、あとのほうの場合は「想像」と呼ばれる。(ヒューム、19 ページ)

記憶や感覚機能につねに伴う信念もしくは同意は、それらが現わす知覚の活気にほかならず、これのみが想像から記憶や感覚機能を区別するものであるのは確かである。信じることは、この場合、感覚機能による直接の印象、もしくはこの印象の記憶における再現を感じることである。判断の主要な働きをなし、われわれが原因と結果の関係をたどる際に推論がそのうえに置かれる基礎をなすのは、知覚の勢いと生気をおいてほかにないのである。(ヒューム、53 ページ)

・・・このことを説明するために、ヒュームは、特定の出来事について忘れていた友人に、それを思い出させるためにいろいろ説明をして、ついに友人がそれを思い出す、というシチュエーションを用いている（ヒューム、52 ページ）。

しかし、この事例一つだけで記憶と想像の区別を特定などできるのでしょうか？ 記憶はあるがぼんやりしていることがある、あるいは確かにその事実があったことは覚えているが具体的な情景が今一つ明瞭でない場合もある一方、想像にすぎないのにその情景が明瞭である場合もあるだろう。そもそも想像が明瞭でなければ小説を書いたり、読んで理解したりできるであろうか？ 「**知覚の勢いと生氣**」は記憶と想像とを区別する基準にはなりえないのである。

さらに言えば、想像した情景をまた思い出したりすることはないであろうか？ それは「記憶」ではなかろうか？ 想像と記憶との関係とは、ヒュームの言うような単純なものではないのである。

また、ヒュームは「**記憶の印象**」（ヒューム、51 ページ）と表現している。あるいは「**印象と観念との中間ともいえるような場合**」（ヒューム、19 ページ）もあるとしている。また、記憶と想像という「ふたたび観念として心に現れる」「二通りの違った現れ方」（ヒューム、19 ページ）について説明しているのに、「**印象をくり返す機能は「記憶」と呼ばれ**」（ヒューム、19 ページ）るとするのは、あまりに一貫性がないと言えないだろうか？

記憶というものは、特定の印象を再び思い起こしたときに現れる「観念」ではないのか？ 記憶を「印象」としてしまっただけは、印象⇒観念というヒュームの枠組みそのものを否定してしまうように思われるのである。

また、ヒュームはシーザーの事例を挙げて説明しているが・・・

われわれは「シーザー」は元老院で三月十五日に殺されたと信じている（ヒューム、49 ページ）

・・・という出来事に対し、

最後には見分けのきく段階をたどって事件の現場証人、目撃者に行きつくのである。明らかに、こうした一連の立証、言いかえると原因と結果の結合の立証は、その全体が、まず初めに、現に見ているか、あるいは思い出されるかする符号もしくは文字をもとにしている、記憶か感覚機能かどちらかのよりどころがなければ、推論の全体が明らかにこしらえもの、基礎のないものとなるであろう。（ヒューム、50 ページ）

・・・誰かしらが受け取る「印象」として、さらにその「記憶」というものがなければ因果関係を立証するためのデータ・情報にはならない、ということである。私たちの一般的認識とそう違わないようには思われる。

しかしこの事例において、疑問も残る。当事者たちの知覚として現れていたとしても、現代に生きる我々においては知覚として現れているわけではない。現代に生きている私たちの記憶でないことは確かである。私たちには、あくまで「観念」としてしか現れない事柄なのである。実際に現場を確かめることはできない、情景は「想像」するしかない。そういう意味で、歴史研究は、自然科学における実験・観察と違い、データの確実性については劣るものであると言える。

ただ、それでもその事象は（おそらく）誰かが観察して、それを文字・文章、文献として残しているという事実が、そうでないただの推論とは違うのだ、より確かなことなのだ、という証明にはなっているであろう（もちろん絶対的真理ではないが）。このあたりは一般的理解とまさに合致すると思うのだが、どうであろうか？

2. 記憶と想像の違いとは？

ここまでヒュームの説明を追った上で分かるのは、ヒュームは記憶と想像との違いを上手く説明できていない、ということである。

では、何が記憶と想像との違いなのであろうか・・・結論から言ってしまうと、**特定の時間と場所（空間）と関連づけられる知覚的経験が記憶、そうでないものが想像**なのである。“われわれは「シーザー」は元老院で三月十五日に殺されたと信じている”（ヒューム、49 ページ）というふうに、時間（3月15日）と場所（元老院）と、暗殺という出来事とが、結び付けられているのである。

もちろん時間（あるいは場所）が明確でない場合もある、去年のいつか・・・とか、だいぶ前のこと・・・とか、そういった記憶もある。しかし「過去」という時間軸と出来事（を知覚した事実）とが結びつけられている、それが「事実」としての記憶なのである。

ヒュームは、友人の記憶の事例（その出来事について忘れていた友人に、その出来事の詳しい情報をあれこれ話しているうちに、ついに思い出した場合）において以下のよう

に説明している。

忘れていたほうの人物は、初めは相手の話から、そのとおりに時や場所の状況についてすべての観念を受け取ってはいるが、しかし、それらを想像の単なるつくりごととしか思っていない。ところが、記憶にふれる状況に話が及んだとたんに、いま

や、まさしく同じ観念が新たな光を受けて現われ、ある意味で以前とは違った感じを伴うようになる。観念は、ほかのことでは少しも変わらないのに、ただ感じが変わるだけでただちに記憶の観念となり、同意されるのである。(ヒューム、52ページ)

・・・あながち的外れな説明ではないようにも思えるのだが・・・ただ言えることは、**記憶としてよみがえるまでは、出来事の観念(状況の心像)と、時間・場所との関連づけを認めてはいない**、ということである。ただ人にそう言われたが、自らはそれらが繋がりが合っていない、しかし特定の情動的感情(スッキリ感のようなものの場合もある)を伴う形で、「ああ、確かにそうだった」と繋がりを認めることができるのである。

ヒュームの言う「感じ」とはこの**情動的感情**のことなのである。もちろん記憶が実際によみがえれば、情景をより鮮明に思い浮かべることができるかもしれない。しかしそうでない場合もあるかもしれない。ヒュームの言うように、常に知覚の勢いや生気が強くなるとは限らないのである。

観念は変わらないのに「感じ」が変わる、という具体性を欠く説明では誤解を招いてしまうのである。より正確に説明すれば、

- ① 観念そのものは変化していないと思われるが、納得する時に起こる情動的感情が新たに現れる場合
- ② 情動的感情とともに、観念そのものがより鮮明に、より具体的になる場合

・・・双方があるように思われるのである。つまりヒュームは知覚の記憶として現れる観念そのものの変化と、その観念とは別個に現れる情動的感情とを区別できていない、と考えられるのである。これはヒュームの「信念」に関する理論に関係してくるので、別稿で詳細に論じることにする。

3. 想像した記憶、という場合もある

時間・空間と関連づけられる知覚経験が「記憶」ということなのであれば、想像であれば、「昨日、自分の家で、行ったことのない場所へ旅行したことを想像した」というふうに時間・場所と「想像したこと」とを関連づけられれば、「想像した記憶」つまり事実として認められるのである。

さらに話を進めれば、想像であっても、それが「想像した事実(そしてそれを記憶として迎える)」であれば、当然因果関係の要素になりうるということでもある。例えば、

人はあるシチュエーションに置かれれば似たような事柄を想像してしまいがちだ、とかそういった因果関係は当然構築可能であろう（もちろん蓋然性 probability の話になるが）。

ただその場合、様々な人たちが実際にそういった想像をしたのだ、と「言葉」で調査者へ報告する必要があるのは当然のことである。調査する人が自らの「想像」で皆もそう考えているだろう、と予想するだけでは因果関係の「正しさ」を認めることなどできない（それはただの推論）。先のシーザーの事例と同じく「符号もしくは文字」（ヒューム、50 ページ）としての記録、報告が必要なのである。

つまり、ヒュームの因果関係の必然性議論における「印象」「観念」の区別は不正確、そして「印象」「観念」という区分のみでは不十分な説明しかできない、ということなのだ。「印象」であれ「観念」であれ、それが特定の時間・場所と関連づけられる「事実」であれば、因果関係の必然性をもたらす事象となりうるのである。